

---

# 翡翠と闇王

Akatuki

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翡翠と閻王

### 【Nコード】

N4679Z

### 【作者名】

A k a t u k i

### 【あらすじ】

本来は存在しないはずの、一冊の本から始まった物語。

これは、少年と少女の何でもない、しかし、だからこそ大切な時間を書いたものである。

GODが出る前に、抑え切れず書いてしまいました。  
キャラの口調には全く自信がありません故、ご了承ください。  
この話は、BOAからのIF物+ご都合主義設定となっております。  
す。

## （前書き）

開いて頂きありがとうございます。

色々突っ込み所は有るでしょうが、一先ずスルーして読んでみてくださいください。

口調には自信がありませんので、指摘等ありましたら、教えていただけるようお願いします。

彼女との出逢いは突然だった。

あやつとの出逢いは突然だった。

最初、僕は彼女とどう接すれば良いのか分からなかった。

最初、あやつは何かと我と言葉を交わそうと話し掛けてきた。

僕は彼女を生粋の王様なのだと思っていた。

我はあやつを軟弱者だと断定していた。

けれど、それは間違いだと気づいた。

彼女は王様ではなく、前へと進む道を見失ってしまった一人の女の子だった。

あやつは軟弱者などではなく、暖かな優しさを、確かな強さを持

つ男子だった。

気づくと、彼女は僕にとって欠かせない人となっていた。  
気づけば、我はあやつの存在しない世界など考えられなくなっていた。

始まりはまた別の一冊の本。

そして突然の出逢い。

今ではその出逢いに僕（我）は感謝している。

あの出逢いが無ければ、僕（我）は彼女と共あやつに在る事は、未来永劫有り得なかったのだから……

翡翠と闇王

「他愛も無い、されど大切な時間」  
はじまります。

太陽が昇りきってからさほど時間が経っていない頃、同居人である少女と共に朝食を食べていた少年は、その少女の口から伝えられた事によって箸を動かす手を止めた。

「……え？」

「む？聞いてなかったのか。先程うぬの部下達から連絡がきて、

今日は休暇にした故、彼女とゆっくりしてる。と言っていたぞ」

と、洗練された所作で食事を続けながら少女は言う。

その部下達の言葉には若干の揶揄が含まれていたのだが、少女はそれに気づかず、そのままの意味で捉えているようだ。

「……気遣いは嬉しいんだけどなあ」

少年は微妙な表情で呟く。

少年の働いている職場はかなり特殊な場所で、とある理由からとても多忙な場所なのだ。

その仕事場で最も能力に長けているのがこの少年で、少年がいるのといないのでは仕事効率が倍以上違う。

気遣いと仕事場の現状を頭に浮かべて困った様子の少年に対して少女は大きく溜め息を吐く。

「部下達の好意を素直に受け取るのも長（王）の役目だと我は思うが？」

「いや、実際僕はそんなに偉くなんかないよ」

一見、謙虚なんだなと思える台詞だが、少年が本気で言っているのは見れば分かる。

「……知らぬは本人だけとな」

「ん？何か言った？」

「何も言つとらんわ」

呆れる少女はふと何か思いついたのか、口元を楽しげに歪める。

「という事は、うぬは今日一日時間を持て余すというわけだな」

「まあ、そうなるね」

正確には手持ち無沙汰という言葉が正しいのだが、概ね合っているため少年は何も言わない。

耳を傾けている少年に少女は、さながら配下に命令する王のように告げた。

「今日一日、私の言うことを聞き入れよ」

少年ユーノ・スクライアと少女ディアーチェの一日が幕を開けた。

ユーノは朝のディアーチェの言葉に特に考えることもなく了承した。逆に、わざわざそんな風に言わなくても別に聞くんだけど・・・と疑問に思っていた。もう慣れたし。

まあさすがに無理な事は無理だし、聞き入れにくいものも遠慮させてもらうが。

そして午前、昼と時間が着々と過ぎていく。

だがディアーチェの命令？は一向に聞こえてこない。

あれ？とユーノが疑問に思っている・・・そんな時、ディアーチェの口から放たれた。

「ユーノ、今から私の座椅子になれ」

「ゴメン。もう一回言って」

「さっさとここに座れ」

手でソファアートを叩きながらディアーチェが言う。ユーノの言葉は



軽く流された。仕方なく言われた通りにソファに腰を下ろすと、そのユーノの膝の上にディアーチェがふわりと座った。そして背中をユーノへと凭る。

「えと、それでどうすればいいの？」

「そうだな・・・うむ、手が空いているな。なら我の前に手を回している」

と、何の躊躇いもなく言うと、ディアーチェはそのまま何処からか出した本を持って読書を始めてしまった。

（無防備過ぎないかな？）と思わなくもないが、それだけ信頼してくれているのだらうと結論づけたユーノは指示通りに両手をディアーチェのお腹辺りに回す。

ちようど後ろから抱きしめている形になる。

それから、お互い特に話すでもなく、静かな時間が過ぎていく。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ペラ、ペラツと本がめくれる音が響くほどに部屋は静かだ。

ユーノはただディアーチェを抱きしめて座っている。

ディアーチェはただユーノに身を預けて読書している。

互いにこの状況に違和感はないようだ。むしろ二人にとってはひどく心地が好いらしい。

（それにしても・・・）

ユーノはディアーチェの体温と甘やかな香りを感じながら考える。最初出会った時には、彼女が自分を信じてくれる日が来るのだからかと本気で悩んでいた。

しかし現にこうして彼女は体を預けてくれている。  
「……………本気で座椅子としてしか見られていない可能性もあるが。」

「……………それは無いと信じたいな」

「む。何か言ったか？」

「何も」

読書に集中していて曖昧に聞き取ったのだろう。

ディアーチエの問いにことなく返すと、少女はそうかとだけ返して再び本へと意識を戻す。

そんな彼女を見詰めながら、ユーノはふと思った。

（今日は書庫の皆の好意でこういう時間が取れたけど、またこんな時間を過ごしたいな）

ユーノはさりげなく少女へと回している腕の力を強めていき、もう一度同じ様な状況になる自身と彼女を思い浮かべて、暖かな笑みを浮かべた。

End

余談だが、夕食の際もそのままユーノはディアーチエの座椅子と化していた。

さらに頬を赤らめたディアーチエから「あ、あーん……………」などという戦略級兵器の一撃を放たれたユーノは抵抗という二文字を出せなくなってしまう、少女の行為を恥ずかしがりながらも受け入れた。

さらに就寝時、ディアーチェから「ユ、ユーノ、うぬに我との添い寝を命じるっ！」という命令を貰い、ユーノは前に友人である少女の兄から教えて貰った土下座でそれを勘弁してもらっていた。

End?

少年に背を預けている少女はというと実は――

（我は、我は何をしておるのだあああああっつ！！！）

――全く読書に集中してなどいなかった。

裏話     ディアーチェの戸惑い

そもそも、ディアーチェがこのような行動に出たのには理由があった。

それは、彼女が持つ少年へのよく分からない感情が原因だった。自身と少年にとって重要な出来事が有った日から今日まで、少女は少年へ時々不可解な苛々を募らせていた。

どんな時かと言うと、

・ユーノが自分を構ってくれない時。

・ユーノが部下の女性と話しているのを見た時。

・ユーノが友人と会うと行って出かけた時。

・等等……

という時だ。

そういう時の苛々をディアーチェは自分なりに考えて言葉に直してみた。

その結果たどり着いた言葉、気持ちは、

（何故、我ともつと共にいてくれないのだ）

というものだった。

とある事情から同居しているから、確かに共にいる時間は他人よりは多いだろう。（ユーノは自宅よりも職場にいる時間の方が長い時もあるが、ディアーチェは最近仕事を手伝ったりしているので問題ない）

だが、自身の考える共にいるとは、それは何か意味が違う気がする。とディアーチェは感じている。故に、今日一日は自分が彼を縛ってしまおうと考えて行動したのだが。

（うむ。心地好いな……。って、違うっ！何だ、何だこの状況は！？何故我はユーノを座椅子扱いしてさらにだ、抱きしめさせている！？）

実は言うところ、ディアーチェは自覚してはいないのだが、頭のほんの片隅では彼の存在をもつと近くで感じたいと思っており、それが無意識に働いてしまった結果がこの「The・密着」だった。

自身の色々ぶっ飛んだ行動に混乱しかけるが、そこは王としての矜持で踏み止まる。矜持の無駄遣いである。

しかし今更撤回など出来ず、結局「The・密着」を続けるしか

なかった。

しばし時間が経ち、落ち着いてきたディアーチエは思考する。

（しかし、今我が感じている心地好さはかつて感じていたものに似ているな……）

ディアーチエは数分本を読む振りをしながら考え、答えにたどり着いた。

（……そうか。深淵の闇に囲われている時に感じていたものに似ているのか）

それは、ディアーチエがまだ今の「ディアーチエ」になっていない時の事、まだ少年と直接相対していなくとも敵であった時のものだ。

確かに、あの時はあれはとても心地好かった。

しかし、とディアーチエは断定する。

（今の我はあの闇よりも、ユーノと共にいる時間の方が、心地好いのだろうな）

闇統べる王は冷たい永久の闇が当然と考えていた。

ロード・ディアーチエ

だがディアーチエはそうは考えない。

別に闇という存在が嫌いになっただけではない。

ただ闇よりも、ユーノと共にいるという事の方が大事になっただけの事なのだ。

「……それは無いと信じたいな」

「む。何か言ったか？」

「何も」

と、何かユーノが呟いた気がしたが、特に何も無いようなのでデ  
ィアーチェは再び思考に戻る。

（心地好い。言い方を変えるなら、暖かい。そうか、これが暖か  
いということか・・・）

ディアーチェは理解し、そして考えついた。  
確かに、冷たいのよりは暖かい方が良くかもしれぬな。と。

（ユーノと共にいる。それだけで暖かくなり、我は閻統べる王か  
らただのディアーチェになれる）

そう考えて、ユーノへのとある感情が激しく燃え盛ったのをディ  
アーチェは感じた。

もはや、不可解という言葉では抑え切れないほどに。

（・・・今度、桃子に相談するでしょう）

ディアーチェは前に連れていって貰った喫茶店で会った女性を思  
い浮かべ、この感情の正体がかかるかもしれないと期待で胸を膨ら  
ませた。

期待で胸を膨らませていたために、少年が抱きしめる力を強めて  
いたことに、少女は気がつかなかった。

余談だが、荒ぶる感情を抑え切れずに「あ、あーん」をユーノにやってしまったのと、ユーノに添い寝を命じてしまった事（断られたが）を冷静になって思い返したディアーチェは、途端に恥ずかしくなってベッドの上で悶えていたという・・・。

E n d

（後書き）

一先ず言わせて頂きます。

私は、

なのは、フェイト、はやて

よりも、

シュテル、レヴィ、ディアーチエ

の方が大好きです。

ユーノとエリオも大好きです。

なのフェはやのファンの方々には喧嘩は売ってない事を申し上げておきます。だから、怒らないでくださいm（・ー・）m。

さて、需要があるか分からないが、始めました、

ディアーチエ×ユーノが。

はい。ユーノ×ディアーチエではありません。あくまでディアー

チエ×ユーノです。これ意味分かりますよね。

いや、最初は

シュテル×ユーノ

だったのですが、最近、

ディアーチエ×ユーノしか思い浮かばないんです。

レヴィは、嫁さんというよりは妹ポジションかな？

まあマテリアル三人×ユーノというのもありなんですけどね。多分やっちゃいますよ？

とまあここまで気分上々でやってきました。

とりあえずこれ自体は短編で上げておきます。

何故かと言うと、安定の連載が可能か分からないからです。

また続きを短編で上げる予定（未定）ですので、その際は読んで



みてください。

疑問、質問、ダメだし等々あるときは遠慮なくどうぞ。  
では、これで失礼します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4679z/>

---

翡翠と闇王

2011年12月15日22時51分発行